

西山雄二（編著）『いま言葉で息をするために：ウィルス時代の人文知』勁草書房、2021年。
を読む（3）『歴史・宗教・人類学』（pp. 221-306.）

■歴史

10. ブルース・キャンベル（訳：大貫俊夫）

1) 「疫病と歴史の「大遷移」～ブルース・キャンベルとの対話」

聞き手：バスシェバ・デムース、ダゴマー・デグルート、ティム・ニューフィールド

a. 著作『大遷移：後期中世世界における気候・疫病・社会』と14世紀という時代：

- 汎ユーラシア商業システム、アフリカ回り航路の発見、西ヨーロッパによる世界経済の覇権掌握の歴史。人口減少、経済活動の縮小、商業の再編、政治的・宗教的境界線の引き直し。中世気候異常期、旧世界でのペスト第二次パンデミック発生。これら全てが多元的に発生し、相互に関連した時代。
- 14世紀は気候、疾病、社会の変化が加速し不可逆になる「回帰不能点」。変化の軌道が変わり、以後の歴史的発展の道筋をつけた。

b. 疫病、紛争、気候変動の関連性：

- 人間と自然界を結ぶ複雑な相互関係網によって明確になる関連＝社会生態系（socio-ecological systems）。気候と社会、生態系と生物学、微生物と人間が構成要素。
- 中世後期は、社会生態系が不安定化した第一期、「転換点」を迎え回帰不能になった第二期、新しい社会生態系が確立する第三期に区分できる。中世のパンデミックは、気候の不安定化、経済の低迷、政治的な対立が激化する中で、起こるべくして起こった。

c. 人類史の他の時代におけるパラレルな状況：

- ジェフリー・パーカー『グローバル危機：17世紀の戦争・気候変動・大惨事』（2013年）
- ジョン・L・ブルック『気候変動とグローバル・ヒストリーの流れ：困難な道程』

d. 14世紀の気候変動に対する復元力（レジリエンス）：

- ヨーロッパ農業が本質的に混合農業（耕作地と放牧地、作物と家畜の種類の入れ替えが容易）であり、ペスト菌が関与するまでは飢饉に対するレジリエンスを持っていた。
- 中国や東南アジアなどの稲作農耕システムは、牧畜の規模や作物の種類も少なく、アジア・モンスーンの信頼性が損なわれたことで、ダメージを大きく被った。

e. 病と社会生態系

- 病気は、哺乳類や昆虫を含む生態環境、人間の貧困、移動、コミュニケーションパターンと密接に関連。疾病の起源と広がりを理解するためには社会生態的な関係網を再構築する必要。

f. 急速に進歩する科学研究と歴史学：

- 気候学や生物学の進歩は、歴史学に再考を促す。環境と社会の相互作用をより厳密に

分析するため、より多くの優れたデータベースや年表の作成が必要。歴史アーカイブにも過去の環境の状況を明らかにするための豊富な情報が含まれている。

g. 中世経済史からグローバル環境史へ：

- 地理学の研究としてイギリス中世の荘園経済を研究し、大凶作、牛ペスト、黒死病が貧しい農村社会に与えた影響の甚大さを確信。
- 古気候指標が利用可能になり、災害を広範な社会生態的分脈で捉えるための気候復元ができたことで、グローバルな環境プロセスの影響を十分に考慮した形成期の経済史を執筆。

h. 『大遷移』からの教訓

- 気候システムの不安定性、異常気象の突発性、微生物の科学的制御の必要性、武力紛争の経済的影響、全てが同時発生する可能性。

2) 「黒死病とコロナ以後の歴史学の未来」

- 哺乳類から人間への感染、動物性風土病から流行病へ、最終的にパンデミックへ。旧世界に多くの前例。
- 黒死病（第二次ペスト流行）： 致死的な細菌エルシニア・ペスティスが、地中に生息する野生のマーモットやネズミを介して人間へ。食べ物やノミが媒介。自然の保菌地は気温や湿度に影響される。ゲノム解析により、第二次パンデミックの起源は、青海・チベット高原のペスト貯蔵地の可能性が高いことが判明。人口の少ない中央アジア（キャラバン）から黒海の商業港（海上ルート）へ。防疫措置のない時代に商業と都市の発展により感染拡大。
- 経済と政治の不安定化（戦争によるキャラバンルートの封鎖、銀行の破綻、教皇庁の弱体化）、気候の不安定化や変動（雨天、火山噴火、モンスーンの復活や不調）、これらのストレスが高まった時代にペスト発生、壊滅的な変化をもたらす。

「気候変動、異常気象、生態系のストレス、致命的な病原体の再活性化などすべてが密接に関連していたことがわかり、啓示と変革をもたらされた。これまでもっばら西洋の視点から見てきた突発的な歴史上の出来事が、アジアを起源としながらも世界中に広がる、複雑で多面的な現象だったことが明らかになったのだ。黒死病を引き起こしたと思しき気候の威力は地球規模のものであり、その一方で、長い歴史のなかで培われた広範囲にわたる人間同士のつながりによって、黒死病は最終的に三大陸に伝播することになった。アジア、アフリカ、ヨーロッパである。歴史文書や歴史学的手法だけでは、このような洞察を得ることで出来事に対する認識を改め、さまざまな学門分野を横断してこれほど多くの議論・研究を生み出すことはできなかつただろう。また、文書史料は必要不可欠だが、それだけでは第二次パンデミックについてなおも数多く提起され続ける未解決問題に答えることはできない。前進するには、歴史家の手法・証拠と、生物考古学者を含む自然科学者や環境学者の手法・証拠とを組み合わせる必要がある。歴史家と科学者のあいだで直接協力関係を築くことがとくに生産的であるように思われる。」(p. 240)

■宗教

11. ジャン＝ルイ・シュレゲル (訳: 伊達聖伸)

「コロナウィルス時代の宗教」

「主を畏れることは知恵の初め」(『聖書』詩編 111 章 10 節)

問: 戦時には信仰と実践の数字が増大する。ではコロナウィルスの時代ではどうか? 衰退に歯止めがかからないと言われる「既存の」キリスト教はどうか?

・ 隔離前

- 大惨事のうち、最初に数えあげられるのが疫病。「終わりなき死」からの救済を求める。
- 第二次ヴァチカン公会議以来、全ての「悪」からの「解放」を懇願する祈りの文句は消えた。背景には、全てに神を介入させる呪術的思考からの脱却と、科学が大惨事を説明し私たちが救う潜在的な力があるという認知の共有。
- しかし、1980 年ごろには「宗教的なものの回帰」ばかりが語られるようになる。「伝統」を主張することで新たな活路を見出すものも。
e.g., 福音派、原理主義、ペンテコステ派の教会の爆発的な増加。世界的な大宗教の脱領土化(西洋における仏教やイスラームの拡大など)が一般化。

・ 隔離～抵抗と服従

- 大きな抵抗もなく昔ながらの恐怖と苦痛を呼び起こし、慰撫と保護と安全と希望の必要性を目覚めさせた。しかし、隔離のために、多くは目につかないまま。
- 最も目についたのは、「過激な集団や一部の政治指導者」が、礼拝や祈りのための集会の禁止に従うことを断固として拒否したこと。そこにはグローバル化した奇妙な同盟が見られた。
e.g., カトリック原理主義者、プロテスタント福音主義者、超正統派ユダヤ教徒、イランのシーア派、スンニ派のムスリム。

・ さまざまな伝統の回帰

e.g., 聖体の秘跡による祝別、奇跡のメダル

- カトリック世界の最も古典的な部分が、諸聖人の連禱を自分達の流儀で再び取り上げている。悪＝病気からの解放を祈ること。
- フランスではパンデミックを神罰とする説明は皆無であり、「神はこれらのこと全てとまったく関係ない」としているにも関わらず、なぜ神を呼び起こそうとするのか?
- 「教会の人びとの主要な関心事」は「いかなる犠牲を払っても(教会を)機能させるにはどうしたらよいか」という問いではないか?(コラン)。ヴァーチャルなミサの実施。

・曖昧な輝きの中のヴァーチャル

- ヴァーチャルなミサにより、教会が白人、男性、祭司中心であることが取り繕いようもないほどに明らかになった。
- ドミニク・コランは、教会が隔離の中でも技術によって信者との完璧で途切れることのない維持を保証するための手段を見つけているとし、そこにテンプス・クラウスム（閉じられた時間：沈黙に与えられる円形の時間、ゆっくりとした忍耐の時間、省略したり短縮できない時間）がないことを辛辣に指摘。
- 「受肉」をとおして宗教的なものの実在感覚が満たされるということが、無菌状態でウイルスのないヴァーチャル空間によって逆に問題化されているのかもしれない。
- 隔離時代のヴァーチャルは、すでに様々な形で進行している状況を一層強化し、確実なものにする恐れがある。e.g., アイデンティティ重視、伝統主義的、セクト的傾向。
- 新型コロナウイルスが多くの人たちの生活に入ってきて、具体的な不幸が、欠落した内面性、悲劇の感覚、悪（や死）といった根本的な問いを呼び覚ます可能性、寄り添うことと霊的な現前の役割が再評価される可能性はある。また、生物学的な生だけに過剰に執着すること（よき生よりも、ただ生き延びることに執着すること）を批判する声もある。しかし、こうした議論に関心を抱くのはおそらく「特権的な魂」を持つ人に限られ、「凡庸な信者」たちの多くは、脆弱で不確実な状況にあって、まずは慰めと確実なものを再び求めるのだろう。

・追記（2020年10月）

- 隔離措置解除の時期、宗教礼拝はさらに3週間の隔離措置の継続対象となった。キリスト教の大祭であるペンテコステ明けまで。これは多くのカトリックには受け入れ難いことであり、司教会議は解禁を首相に要請したが返答は得られず。しかし、別の宗教団体の訴えを受けて内閣府が下した決定は、礼拝の場所における公共的な集会の「一律的かつ絶対的な禁止」の維持は、礼拝の自由に対する「重大かつ明白に違法な侵害」を構成するというものであり、政府は隔離期間を短縮した。
- 隔離の継続へのその他の危惧： ミサという財源を失ったことで司教区の財政困難をもたらした、宗教的な葬儀に対する人数制限が非人間的、ヴァーチャルなミサがこれ以上定着した場合、教会に人が戻ってこない可能性。また、すでに自分の望む宗教的選択をしてきた個人主義的な人々が、もはや教区内のカトリック教徒ではなく隣人や、友人や広い意味での家族との「親和性」によって共同体を作ろうとしている。
- しかし、ヴァーチャルへの疲労感、人々が対面で集まる欲求を高めてもいる。
- カトリック教会で起こったことは他の宗教でも起こったのか、という疑問。マイノリティであり、あまり耳に入らなかった。
- カトリックにとっては、パンデミックにより余儀なくされた儀礼の隔離は大きな試練であり、そしてすでに進行している危機的な動向を拡大強化した。

■人類学

12. フレデリック・ケック (訳: 小林徹)

「アジアの虎たちと中国の龍～パンデミックに対する前哨地間の競合と協働 (SARS から COVID-19 へ)」

「…グローバルな危機の教訓の一つは、高価な封じ込め措置を回避するためには、高価な警告信号が、病を拡散前に抑止するのに十分なだけ早く届けられねばならない、ということである。…本論文は、備えに関する第三の技術、すなわち前哨とみなされる領地を描き出す…」

e.g., 2002-04 年の SARS コロナウィルスの感染爆発の際に、アジアの諸地域は早期の警告信号を検出するための国民国家間の協働がみられた。

「備え (preparedness)」が用いられるのは、むしろリスクが計算できない場合であり、それにもかかわらず、来るべき災害による影響の緩和を創造せねばならない場合…「備え」は、想像の技術として、あたかも災害がすでに目の前で起こっているかのように働き、潜在的装置によって、この出来事を顕在的なものとして感知するのである。」

動物のメタファー

- 中国の龍：危機的変異を含んだ沈黙する病原体貯蔵地のメタファー
- アジアの虎たち (香港、シンガポール、台湾、韓国)：迅速な対応のメタファー
- 日本の狐：パンデミックの脅威に対する対処の利口さのメタファー
- ベトナムの狼：力強さのメタファー

なぜこれらのメタファーを使うのか？

- 「パンデミックに対する備えが依拠する美德や力量が、もっぱら (真理と客観性に結びついた) 認識的なものでもなければ、(人民に対する良い統治や環境の尊重に結びついた) モラル的なものでもなく、結局のところ、(生物が緊張に満ちた状況に反応する際に競合と協働を混ぜ合わせて作る美しい信号に結びついた) 美的なものだということを提示するためである。」

警告信号に対する動物行動学的アプローチ

- 国民国家間の連帯の本質が、伝染病に対する過去の経験に由来する前哨的テクノロジーの生命的利用と、みずからを取り巻く環境に関する長期的知覚にあることを示す。

結論：

パンデミックに対する備えは、動物が捕食者の脅威を緩和するために発達させてきた美的振る舞いに依拠する。

「捕食や生殖という緊張に満ちた状況において、動物たちは、前哨的行動に訴え、美しい信号を

通じて互いに交流する。同様に、…アジア諸国は、競合して自国民を制御し、ウイルスに関する正しい声明を発することによって、信頼をめぐるグローバルな競合において、ということつまり、より良い世界を作り上げるための協働において、投資家たちに高価な信号を送っているのである。」

「(パンデミックとの戦争においては)、前哨的装置が、金融的かつ美的な価値を備えた高価な信号を通じて安全を提供することによって、諸国政府に、投資家を誘惑するための競合における強みを与えているのだ。」

小林徹「訳者解題」から

危機に対する「備え」の問題の哲学的側面:

- 防止 (precaution) : 実際に発生した病を隔離し、社会の内部から排除する措置 (病原体保有動物の殺処分など)
- 予防 (prevention) : 既に発生した病に関する客観的データから、来るべき病への対処法を導き出す
- 備え (preparedness) : 未知の危機に対して想像力を用いて「あたかも災害が既に目の前で起きているかのように」対処するやり方 → 潜在的破局のイメージに基づく感性的問題

●「備え」の概念: 人間/動物 (文化/自然) の境界線を問い直すパンデミック/テロリズムの領域を、動物行動学的で神話的な広がりの中で問題化する働きを持つ。人間が動物とともにおこなう環境に対する対処を含意。その概念のうちには、生物が環境の中で目前の脅威をどのように捉えているかが潜在的に書き込まれており、そこには、私たちが動物たちとともに危機に身構え、世界の在り方を問い直す仕方が表現されている。

監視: 「格別に強度な知覚の様式」

前哨地: 「警告を発しながら最初に崩れ落ちる場所」

- 自然的脅威と政治的脅威が鋭く交叉する場所で、当事者たちは脅威に直面し、知覚様式そのものを変容させる危険信号を発する。ニワトリたちがみずからの死によって鳥インフルエンザ・パンデミックの到来を告げたように、あらゆる当事者たちが、みずからの知覚様式を根本的に変容させながら、来るべき危機を予告。

動物的メタファー

- 危機的状況下のアジア諸社会の振る舞いを「動物行動学的」に捉えることによって、前哨的領地への問いが、そして危機に際しての連帯への問いが浮上。ケックは、このような問いの場を「神話的次元」と呼ぶ。「神話」という言葉は、真理の追求や善の実行とは異なる次元を指示している。前哨の概念が示唆している知覚様式の変容は美しさに関わるのだ。

「危機」と「美」という (意見以外にも映る) 組み合わせ

e.g., ニワシドリのメスは、オスの作製した構造物を訪ねて最も美しいものを作ったオスと交尾／騎士たちは危険な戦闘行為に身を晒しつつ、豪華絢爛で怪物的な美しさを過剰に発揮することで自らの価値を誇示。

「生殖という生命的で緊張に満ちた状況の中で、この前哨的動物は一見して生命活動に無関係な装飾品を誇示するのだ」

「動物的メタファーが明らかにするのは、まさにこの過剰な投資を惹きつける美の次元であり、「龍」や「虎」や「狐」や「狼」といった動物たちが危機的状況の中でみずからの美しさを誇示し合うこの神話的次元こそが、アジアにおける様々な政治主体間の競合や協働を巻き込むグローバル経済の動きを駆動しているのである。」(p. 303)